

NEWS LETTER KUMAMOTO

2016.Summer Vol. 110

■発行:一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団

〒860-0806 熊本市中央区花畑町 4-18 熊本市国際交流会館

■Publisher: Kumamoto International Foundation

4-18 hanabata-cho, chuouku, kumamoto city, 860-0806

TEL:096-359-2121/ FAX:096-359-5783

e-mail: pj-info@kumamoto-if.or.jp URL: <http://www.kumamoto-if.or.jp/>



特集「それぞれの熊本地震」 〈外国人被災者の視点から〉



2016年4月14日・16日、県内を最大震度7の二度の大地震が襲った。その後も2000回を超える余震が続く熊本地震だ。今、4ヶ月が過ぎ、改めて犠牲になられた方々へ心からお悔やみ、そして被災者の方々へお見舞いを申し上げます。

当事業団が熊本市国際交流会館での外国人避難対応施設運営を行う中、コムスタカ〜外国人と共に生きる会〜(熊本の民間組織)による炊き出しなど多くの皆さんからご支援、ご協力をいただいた。また、九州地区地域国際化協会(*)連絡協議会と多文化共生マネージャー(**)全国協議会の協力をいただき「熊本地震災害多言語支援センター」を運営した。全国、全世界より多くのご協力、ご支援、励ましのお言葉をいただいた。本紙面を借りて、心より感謝を申し上げます。

月日の経過で、地震の事は片隅に追いやられ、学校・仕事・家庭に多忙な日常が取り戻されている。しかしな

がら、地震発生の可能性はどこにでもあることから、熊本地震の経験を風化させず、今後の防災、減災につなげていきたい。

そこで、「ニュースレターくまもと」では、災害時要援護者とされる外国人の方々に熊本地震被災体験を語っていただく特集を組んだ。彼らが言葉や文化の違いから日本人以上に恐怖や不安を抱えたことは間違いない。一方、それらを乗り越えた「つながり」、「共助」があった。彼らが支援者側として地域を支えた。今後の多文化共生社会を考える機会になりますことを切に願いたい。

* 地域国際化協会:

総務省より、「行政と民間をつなぎ、地域の国際化を推進する中間的支援組織」として認定され、都道府県と政令指定都市に設置される。

(当事業団は熊本市の地域国際化協会)

** 多文化共生マネージャー:

(一財)自治体国際化協会が実施する在住外国人に関わる諸制度や諸課題への理解を深め、多文化共生社会の進展への知識の習得、関係機関・部局等とのコーディネート能力を養成する研修を受講・終了した多文化共生文化の専門家。

〈特集〉それぞれの熊本地震

〈外国人の方々の体験 ～自助から共助〉

ディヌーシャ ランプクピティヤさん・・・P2

サマンサ ツィムニーさん・・・P3

ディビヤさん&リピカさん・・・P4~P5

熊本地震の概要・・・P5

目次

Contents

〈外国人コミュニティの支援活動〉

マルロ・スイスワヒュ(熊本イスラミックセンター)
・・・P6

国際交流会館における
外国人対応避難対応施設としての活動について
・・・P7

ちょっと日本語/きふプロ
平成28年度賛助会員・・・P8

熊本地震と私

ディヌーシャ ランブクピティヤ（スリランカ）

私はディヌーシャ ランブクピティヤと申します。スリランカ出身です。仕事の関係で、4月1日から家族と一緒に熊本に引っ越ししてきました。熊本地震に遭ったのは、引っ越しして来てちょうど二週間目になった日です。本稿では、熊本地震を経験し、被災した一人の外国人として、私の体験及び私が感じたことを記します。



本震後の我が家の中

地震直後に私が一番つらく感じたのは、孤独感です。これは、熊本に引っ越しして来て二週間しか経っていない私には、日本人の知り合いも母国人の友人もあまりいなかったため感じたことだと思います。避難場所はどこかも十分わかっていなかった私が、前震直後に、主人と小学生二人の子供（長女 10 歳、長男 7 歳）を連れて、すぐ子供の小学校に避難しました。子供を通わせはじめてまだ 4 日間しか経っていない私達にとっては、子供の小学校の先生方、保護者の方々、児童などもそれほど顔見知りではありませんでした。



自衛隊が小学校の運動所に作ってくれたテント。本震の時に私達家族はこのテントの中にいたので、よかったです。

小学校で私が救われたのは、さっちゃん（仮名）でした。小学校に来た私達を見かけたさっちゃんが長女の名前を呼びながら、私たちの近くに走って来てくれ

ました。後ほど、長女に聞いたら、さっちゃんは、長女と同じく、同じクラスに転入してきたばかりの 9 歳の子で、長女と仲良しでした。しかし、私とさっちゃんの出会いは、避難所で初めてでした。避難所では、声をかける・かけられる誰もいない私達家族にとっては、よく話をしてくれて一緒にいてくれるさっちゃんは大変救われる存在でした。

震災が起きて三日目には、スリランカ人の家族が私達のいた小学校に避難してきたときに、私たちは大変心強く感じました。孤独感からも逃れました。

また、少しでも知っている友達や知り合いから電話をいただくと、私は大泣きでした。賃貸マンションに住んでいたため、実は、震災で私が無くしていたのは、家の中の家具や電化製品のみでした。それでも、引っ越し直後に起きた震災で私は、複雑な気持ちになり、落ち着かない毎日を送っていました。余震を怖がる子供達をしばらくの間、福岡の友達の家に預けたこともその一つの原因でした。

子供の精神を考え、安心かつ安全に暮らせることを優先にし、私と主人は、震災直後から必死で新しい引っ越し先を探しました。そのような中、震災以前に借りていた家の解約の件で大家さんと揉めることにもなりました。

最後に、熊本地震を経験し、被災したことで私が学んだことを一つ記します。震災が起きた時に、外国人も日本人も孤独さを感じるが、互いに話し合う、声をかけ合うだけで、その辛さを無くすることができるということです。相手に声をかけるには、少し勇気がいると思いますが、他に何もかかりません。声をかけられたことによって、被災者、時に外国人被災者が大変救われます。



5月14日の日経新聞に載っている私と主人の写真では、スリランカ人友達の家族3人と私の家族4人がこのトラックに寝る毎日でした。

地震体験

(JET プログラム ALT (外国語指導助手) プロジェクトマネジャー

サマンサ・ツィムニー (アメリカ)

【地震の日…】

仕事の後、長い一日を終えて、私は疲れていました。日本人の友人とスカイプで通話する約束をしていたので、その前に料理をしました。あの日は頭痛がひどくて、電話の約束をキャンセルしようかな…とも思いましたが、シャワーを浴びてパジャマに着替えて(ジョギング用のショートパンツ)髪も濡れたままでした。そして友人とおしゃべりしている途中で、“地球が暴れ出した”のです。突然地面が揺れ始め、パソコンで話していた友達に(愛知県に住んでいる長年の友人)ちょっと待って!と伝えました。しかし、驚いたことに揺れは止まりません。私は飛び上がって、片手でテレビを掴み、もう片方の手でパソコンを押さえました。彼女には「後でかけなおすね!」と伝え…しかし、結局“後で”はありませんでした。この地震は、私が熊本で暮らした3年間で遭遇したものとは全く規模が異なる、はるかに大きなものだったからです。

【みんな逃げて!】

私は携帯電話とお財布だけを掴み、揺れで倒れた冷蔵庫を飛び越え、何とか玄関に辿り着きました。私はドアを開け放ち、「外国人、みんな逃げて!」と叫びました。以前、地震の後も強い余震が続くことがあると聞いていたからです。もちろん、この時はまさか2つの大きな地震が起こるとは想像もしていませんでしたが…

地震後約3時間、友人たちのグループと近所の高校に近い公園で過ごしました。いつもは第一高校に避難するのですが、この時の地震では既にひどい被害を受けて、所々崩れていたもので、中に入ることができなかったのです。その代わりにしばらくして、代わりに近くの小学校の体育館に行けばいいということが分かりました。教育委員会の担当者や、他の英語教師たちと電話で連絡を取り合いながら、私の頭は爆発しそうでした。思ったほどパニックにはなりませんでした…それよりもまず、周りのみんなと生き延びること、安全を確保することに一生懸命で、何とかみんなを励ましたいという気持ちでいっぱいでした。

【一変した日常】

それから一月、どうやって過ごしたのか、さっぱり思い出せません。友人やホストファミリーと、何度も避難所へ行きました。人生で初めて、たくさんの人と(落ち着いている人も、イライラしている人もいました)食事をもらう列に並びました。芋の子を洗うよう

な温泉も初体験でした。近所の温泉は、お湯が出ず、お風呂を求める人々でごった返していて、入浴時間も足りない、みんなの分の十分なきれいなお湯も、もちろんありませんでした。でも、お湯に入る人の顔は、幸せにあふれていました。



避難所生活の様子

私は、この大変な時に日本にいたことができたことを、神に感謝しました。熊本のほんの一週間前、マンマーが大地震に襲われました。春休みの間、私はマンマーに旅行で訪れていたのも、とても他人事とは思えませんでした。アメリカに住む私の母は、私がマンマーから無事に



自宅の様子

戻ったのかどうか心配して、パニックになって電話してきました。私は大丈夫だよ!と伝え…そのすぐ後に熊本で地震に襲われたわけです。

地震が起きて、食事のほとんどをボランティアや自衛隊による炊き出しに頼る日々が続きました。私たちは幸運だったと

思います。安全で、支援が行きとどいた場所にいられたこと、私たちは本当に幸運でした。日本は、このような事態に対して、ちゃんと備えていましたから。手作りのスープやお肉を焼いて振る舞ってくれた地元のコミュニティに感謝します。避難した小学校で、24時間体制でみんなのお世話をしてくださった先生方、ボランティアの皆さん、ありがとうございました。自衛隊の皆さん、ボランティアの皆さん、こんな時にも笑顔を与えてくれた家族や友人のみんな、本当にありがとう。熊本で地震にあったこと、確かに凄まじい経験でした。それでも生き延びた私たち、何と幸運なことでしょうか。ありがとう、熊本。

熊本での地震体験

ディビャさん、リピカさん夫妻(インド)

【2016年4月14日】

午後9:25、私は大学から戻り、自宅でお茶を飲んでいました。突然、5秒間程だったのでしょうか、強い揺れが起こりました。まるで洗濯機の中に入ったかのような、凄まじい騒音がしました。何が起きているのか理解するまで、3秒程かかりました。こんなことが起こるなんて、全く予想もしませんでした。後日、これはマグニチュード6.4の揺れだったと聞きました。

私達はアパートの2階にいました。身を守るため床にうずくまる代わりに、私は開けた場所を求めてドアへ、そして階段へと走りました。これが私の第一の間違いでしたが…2～4分ほどの間隔で、余震が次々と起こりました。30分後、アパートを出て熊本大学のグラウンドに集まるよう、知らせがありました。

午後10:15分まで、私たちは何の食べ物も口にしていませんでした。幸運にも、私たちは夕食にピザ注文していました。そのため、簡単な食事を取ることができました。大急ぎで、ジャケット、シーツ、軽食、身づくろいに必要な物といった、最低限必要なものだけをバッグに詰めました。持っていける物は出来るだけ持ち出そうとしました。余震が来る度に、家から逃げなければ…と必死でした。

午後10:30頃になり、私たちは大学のグラウンドに到着し、大勢の人が同じように集まって来ているのを目にしました。人々はみなショックを受け、興奮して携帯で自分たちの写真を撮ったりもしていました。

様々なお知らせが流れましたが、みな日本語だったので、何と言っているのか、私たちには理解することができませんでした。1時間経つと、私たちはそれぞれの家へ戻り、貴重



避難したグラウンドの様子

品を持って近くの避難所へ行くよう言われました。私と友人たちは、歩いて数分の距離にある桜山中へと向かいました。私たちはそこで一夜を過ごしました。避難している大勢の人達の恐れや、緊張した空気をひしひしと肌と感じました。それ以外にもうわさ話やひそひそ話、赤ちゃんの泣く声や、反対にショックで押し黙る人々など、現場は混乱を極めていました。揺れが続く中、私は何とか眠ろうとしましたが、また地震が来た時に素早く逃げられるよう、靴や服は全て身に付けたままでいました。

【15日 朝】

私たちは午前8時頃に家へ帰りました。家は、全く違う場所に見えました。全ての物が床に落ち、まるで恐ろしいお化け屋敷や廃墟のようでした。私たちは神に、どうか安全でいられますようにと祈りました。もうこれ以上、このような地震はありませんようにと…情報では、一週間程、余震が続く可能性があるとのことでした。実際余震は、20～40分程の間隔ですっと続いていました。しかしこの時は、前夜に比べて余震の数が減ってきているように感じ、私たちは少し安心し始めていました。私達はこの経験について両親や親戚に話したり、興奮状態で一日を過ごしました。SMSやwhatsapps、それ以外のソーシャルメディアは、メッセージでいっぱいでした。もう地震は来ませんように…と祈りながら、私は料理をし、映画を観ました。私たちは、昨日詰めた非常用持ち出しバッグの中身を片付けました。これが私の第2の間違いでした。夜まで、震度4～5の余震が続きました。静かな夜で、私たちは散歩に出かけようかと考えました。午後11:30頃だったのでしょうか。街全体が、何か不気味な雰囲気でした。人っ子一人、誰もいません。私は静けさを愛していますが、その夜は全く心地よいと思うことができず、今までのどんな夜とも違いました。まるで、大惨事の気配がそこら中に満ち溢れているようでした。その恐ろしい空気の中にいることができず、私たちは急ぎ家へと戻りました。

【16日 夜】

午前1:24、私は、YouTubeでスポーツを観戦していました。最初はゆっくりと、しかしいつもより格段に強い揺れが、より長く始まるのを感じ、これは大変なことになると直感しました。その一瞬後、揺れは大地を揺るがす轟きとなり、周りの全ての物をたたき落としました。この時も、私は冷静を欠いてしまい、自分の身の安全を守る行動を取ることができませんでした。私の心臓は、助けを求めて叫び声をあげました。私はまたもやドアに向かって走りましたが、今回は続く揺れでバランスを保つこともできず、ドアを開けることはできませんでした。何とかドアを開けた後、続く揺れの中を階段へと走りましたが、(これが私の3つ目の過ちでした)私は脚に怪我をしてしまいました。

何とか安全な場所へとたどり着きましたが、人生で最も恐ろしい夜でした。私がお風呂場やトイレにいなかったことは、不幸中の幸いでした。今回の地震は昨夜の揺れよりも強く、マグニチュード7.1/7.4だったと聞きました。街中でサイレンの大きな音が鳴り響いていました。亡くなった人もいる、という噂を耳にしました。たくさんのヘリコプターの音が聞こえ、警察はあちらこちらで奮闘し、ただちに避難をと呼び掛け

ていました。

午前 1:50 頃になり、私たちは精いっぱいの勇気をかき集めて自宅へ戻り、また持てるだけの物をバッグに詰めました。携帯、パソコン、毛布、水、軽食、大切な書類、洋服、タオル、1 週間は避難するつもりで、大きなバッグに詰めました。私たちは、桜山中に午前 2:20 頃に到着しました。寒い夜でした。驚いたことに、200 人以上の人々が学校の外に集まっていました。そこで私は、学校の校舎ももはや安全とは言い切れないと耳にしました。私たちは朝 6 時まで、また屋外で夜を明かしました。睡眠不足と恐れ、不安から、今回私たちは話をすることも出来ないほど疲れきっていました。人は、どれ程屋外で耐え抜けるもののでしょうか。ついに太陽がのぼりました。

午前 7:15、一滴の水もありません。水道管の破損により、水の供給はストップしているのだと聞きました。全てのコンビニは閉まっていた。私たちは、どこか他の避難所は無いかと、必死になって探しました。幸いにも、私たちの大学が支援を提供していると分かりました。私たちは大学へと移り、100 以上もの他の家族たちと一緒に、講堂の一角にうずくまりました。食べ物、水、敷物、毛布が配られました。このことには本当にほっとしました。これで生き延びられる、と



避難先で友人達と

思いました。そこで友人や、他の家族と会えたことに、本当にほっとしました。しかし、続く余震が私たちの希望を打ち砕きました。不安は増大し、両親からの電話は鳴り

やまず、自国へ帰るべきなのではという考えが濃厚になっていきました。3～5 弱の余震が止むことなく続きました。

4 月 30 日までの 2 週間の間、私たちは避難所にとどまりました。同じ被災者である日本人の、安全への素早い備えや、他に助けを必要とする人々を助ける姿勢は、本当に尊敬に値するものでした。熊本市だけでも、地震の直後に約 200 を超える避難所が開設されたと聞きました。

【4 月 30 日】

午後 4 時、私たちは、やっと自宅へ戻ることができました。マグニチュード 9.8 を記録したネパールの地震の記憶が、私たちもきっと生き延びることができるという希望を持たせてくれました。もう一度、第 3 の地震が来るのではないかとこの恐怖はありました。より深刻な被害を受け、多くの死者の出た益城ではなく、熊本市にいられたことは幸運なのだと思います。阿蘇

や、その他の東北地域も、深刻な被害を受けました。地滑りや、押しつぶされた家、家を失った人々のニュースが、全国ニュースになりました。しかし、私はこうして生き延びたことを幸運に思うべきでしょう。ありがとう日本、ありがとう熊本大学。

熊本地震の概要

- 前震 発生日時：平成 28 年 4 月 14 日（木）
21 時 26 分
震源地：熊本県熊本地方
（震源の深さ：11 km）
規模：マグニチュード 6.5
熊本市内震度 6 弱（県内最大震度 7）
- 本震 発生日時：平成 28 年 4 月 16 日（土）
1 時 25 分
震源地：熊本県熊本地方
（震源の深さ：12 km）
規模：マグニチュード 7.3
熊本市内震度 6 強（県内最大震度 7）

熊本市内被害状況（6 月 27 日 現在）

人的被害：死者数 14 人（関連死 10 人を含む）、
重傷者 254 人
家屋被害：全壊 2,365 棟、
半壊 12,359 棟、
一部損壊 72,121 棟

最大避難者数：約 11 万人
（4 月 17 日 08 時頃時点）

熊本市の人口

総人口 739,991 人
（平成 28 年 4 月 1 日熊本市の推計人口より）

在留外国人数

4,497 人（平成 28 年 3 月末現在）

中央区 2,220 人、東区 796 人、西区 550 人、
南区 367 人、北区 564 人

国籍別外国人数

中国 1,838 人、韓国 520 人、フィリピン 476 人、
ベトナム 350 人、米国 174 人、ネパール 148 人、
台湾 124 人、インドネシア 116 人など
合計 87 カ国

在留資格別

永住者 1,553 人、留学 911 人、
日本人の配偶者等 355 人、
家族滞在 347 人、技能実習 310 人、
特別永住者 275 人など

熊本地震における熊本イスラミックセンターの活動について

Marlo Siswahu (マルロ・スイスワヒュ)

熊本におけるムスリムの現状

熊本市は九州の中心に位置し、国内外から多くの観光客が訪れます。現在、熊本には約 350 人のムスリム（イスラム教徒）が生活しています。その多くは留学生、研究者や就業者です。熊本のイスラム・コミュニティに於いて一番多い国籍はインドネシアで、二番目はバングラデシュとなります。その多くは熊本大学の研究者（大学院生）です。

熊本イスラミックセンターのメンバーの出身国はインドネシア、バングラデシュ、パキスタン、マレーシア、エジプト、アフガニスタン、スーダン、キルギスそして少数の日本人で構成されています。メンバーの多くは黒髪及び本荘周辺に住んでいます。

熊本イスラミックセンターはムスリムがイスラム教育を学び、一緒に集い神へ祈りをささげる場所です。

熊本地震

2016 年 4 月 14 日（木）午後 9 時 26 分、近年にないマグニチュード 6.2 の大地震が熊本を襲いました。外国人にとってこの様に大きい地震は今までに経験したことのないもので、大変なショックを受けました。ただこの地震の後は多くの仲間は普段の生活を送っており、今後はこれ以上大きな地震は来ないだろうと考えていました。

4 月 16 日（土）午前 1 時 25 分、マグニチュード 7.3 のさらに大きな地震が熊本を襲いました。この地震は私達に壊滅的な被害と大変大きな心理的なショックを与えました。何人かのメンバー（特に子どもと女性）は、この地震によりトラウマを抱え、家に帰ることができなくなりました。また水や食料を確保することも大きな問題でした。



多くのメンバーは熊本大学と熊本市国際交流会館へ避難しました。何人かは一時帰国し、近隣の県、福岡や広島へ一時避難したメンバーもいました。

2 度目の地震では熊本イスラミックセンターの建物も被害を受けましたが幸運にも誰も怪我することなく建物外へ全員無事に避難することができました。

熊本イスラミックセンター災害救済支援ポスト

4 月 17 日から熊本イスラミックセンターとインドネシア大使館、福岡マスジドと協力して災害救済支援ポストを開設しました。大人や子供を含む 84 名のインドネシア人が熊本大学に避難していました。インドネシア大使館は A S E A N 諸国の中で最初に災害救済チームを熊本に派遣し、熊本大学に避難していたインドネシア人被災者やベトナム人被災者のケアにあたりました。黒髪周辺に住む外国人達は熊本大学へ、九品寺周辺に住む外国人達は熊本市国際交流会館へ避難しました。

毎日日本全国のムスリム達から様々な支援・救済物資などが届きました。地震の後は配達手段（宅配便等）が手配できなかったため、全国からのムスリム支援者達は自分達で車や、トラックを手配し、運転して熊本まで運んでくれたのです。中には東京や大阪、名古屋や富山からも支援物資を運んでくれました。支援物資の多くは食料、水や薬などでした。

この様に全国各地から大量の支援物資が送られてきたため、熊本県内のいくつかの避難所に支援物資を配ることとし、各地域に数組の担当チームを作り支援物資を配りました。



支援物資の分配

熊本大学避難所ではムスリム用のハラルフードが十分ではなかったため、熊本イスラミックセンターに臨時の調理場を作り、避難所に配布しました。もちろんハラルフードはムスリムでもない人も食べることができるので避難所にいる日本人の人達にも配りました。

温かい食事は喜ばれ、熊本イスラミックセンター周辺の住民や、熊本大学以外の避難所の人達も温かい食事を受け取りにきました。

支援物資を配ることによって一番大変だったことは、持ち込む許可を取ることと、必要としている人達を見つけることでした。私達にとって自治体や避難所などの責任者から支援物資を分配する許可を得ることは簡単ではありませんでした。最初の頃は熊本イスラミックセンターの名前を出すと断れました。たぶん、日本人にとってイスラム教徒は怖い・信じられないなどのイメージが強いのかも知れません。毎日のようにテレビでイスラム過激派のテロ行為が放送されていたのでしょうがないのかも知れません。

この問題を解決し、スムーズに支援物資を必要とところに配れる様にするため、どの自治体や避難所での様な支援物資を必要としているか等正確な情報と協力を得るため、警察や熊本市国際交流振興事業団に相談しました。

その協力を得て、私達は水や食料、その他生活用品（トイレットペーパー、生理用品、ティッシュなど）等を必要とされているものを益城町、



御船町、大津町などにある避難所等で必要としている人達へ直接渡すことができるようになりました。

私達は車に避難している人達や壊れた家で避難生活をしている人達にも直接支援物資を配ったりしました。多くの人達が避難所での生活よりも車中泊や自宅での生活を選択していることに驚きました。また何人かの年配いた日本人の避難者は疲れ、生活を再建する気力も失ったように、壊れた家を眺めていました。

今後、私達ムスリムとムスリムでない人々が共に助けを必要としている人々を助けながら共に生きる、強い社会的絆を持つ社会を日本で作っていきたいと思います。

国際交流会館における 外国人避難対応施設としての活動について

平成 28 年 4 月 14 日（木）21 時 26 分、熊本地方を震源とするマグニチュード 6.5、最大震度 7（益城町・熊本市は震度 6 弱）の今まで私達が経験したことがない地震が熊本県下を襲いました。日付が変わった 4 月 15 日（金）01 時 00 分頃、熊本市より一時避難所（外国人避難対応施設）として開設要請があり、職員 4 名が出社し避難所として開館しました。避難者数はさほど多くなく、韓国人 3 人と日本人 1 人の計 4 名でした。余震はかなりの頻度でおりましたが、午後には避難者も全て退出された為、午後 10 時で避難所を閉鎖しました。

余震が続く中の 4 月 16 日（土）01 時 25 分、今度は熊本地方を震源にマグニチュード 7.3、最大震度 7（益城町・西原村・熊本市は震度 6 強）の激しい揺れが再度熊本を襲いました。熊本地震の本震後午前 4 時に外国人対応避難施設（以下、避難所という）を開設した国際交流会館は、4 月 30 日（土）まで 15 日間 24 時間連続の避難所運営を行うことになりました。開設、明かりが付くと直ぐに日本人約 20 人が入って来られました。夜が明けるやホテルの断水とエレベーターのストップで中国、韓国、タイ、アメリカ等の海外からの団体旅行者やカナダ、ニューカレドニア等の外国人旅行者が、多言語での地震や交通情報を求め殺到しました。一刻も早く熊本を離れたい彼らへの交通情報の収集、タクシー手配、旅行社への連絡に忙殺されました。

当日、宿泊を余儀なくされた被災者は外国人 38 人を含む 147 人。その中には、前震から二晩をスーパーの駐車場で過ごしたバングラデシュ人 12 人、同じく二晩を公園で過ごした中国人技能実習生 13 人のグループがありました。バングラデシュ人には小さな赤ちゃん連れの家族や妊婦がいて、初めて経験した地震への恐怖と今後どうなるかという不安で疲れ切った表情でした。それでも柔らかいカーペット床、Wi-Fi 環境、トイレの水に加え、英語での情報提供とイスラム教への配給されるパン等食材の説明や彼らが自ら調理できるオープンレンジを貸し出したことで笑顔が少し戻ってきました。リッチモンドホテルグループからはハール（イスラム教の戒律に合ったもの）のお弁当 400 食が届きました。彼らの殆どは、4 月 19 日（火）熊本-博多間の JR が動き出し、福岡へ移動、数名はバングラデシュへ一時帰国しました。



中国人の技能実習生は来日まもなく日本語研修中に被災されました。土地勘もなく帰国したい気持ちを我慢、

不安をかき消すように日本語の学習に集中していました。そんな中、炊き出しのおにぎり作りをお手伝い、そして、あり合わせの野菜を使って中華料理を振る舞ってくれました。彼らは技能実習先の安全が確認され、避難所を後にしました。



その他の避難していた外国人被災者には、タンザニア人留学生家族があり彼らには 8 ヶ月の赤ちゃんがいました。フィリピン人の家族にも赤ちゃんや 2 歳の小さな子ども、さらに来日したばかりの母親がいました。スリランカ人の家族には妊婦がいました。会社経営のエジプト人は家も会社も立ち入り禁止となって避難してきました。旅行途中で被災したカナダ人やボランティア活動で来熊したフランス人もいました。産院から出産後、直接避難してきたバングラデシュ人の家族もいました。

彼らの居住地と行動様式は多様であったが、日本人と同じように大きな揺れと終わらない余震に底知れぬ恐怖を感じていました。彼らが日本人以上に不安であったことは、殆どの地震情報が日本語であった上に、避難所で使われる言葉には「給水」「配給」など、日常会話には困らない彼らにも理解が難しいものでした。情報の張り紙は漢字混じりで内容が理解できず不安を煽りました。また、食文化や習慣の違いから避難所での生活に、より大きなストレスを持たれたのではないだろうかと思います。

会館避難所では、早い時期（4 月 17 日）に外国人避難者へ聞き取り調査をしながら、個別の復興・自立支援計画を立てました。自宅・アパートが破損し帰宅できない人には熊本市居住支援協議会の協力で新しいアパート探しやカソリック教会には引っ越しや家賃の一部支援をいただきました。恐怖から自宅・アパートでは眠れない人も多く、専門のカウンセラーによる心の相談を開設、母国へ帰国するまでの生活支援を行いました。（こころの復興には長い時間がかかり、今後も継続していくことになる。）

一方、彼らは、閉塞感に陥りやすい避難所生活の中、お互いに支え合い、支援者側にもなりました。民間団体コムスタカー外国人と共に生きる会に協力、支援いただいた炊き出しでは、食器の準備、調理、後片付けを、彼らも一緒に行いました。赤ちゃんや小さな子どものお世話はみんなでやり、避難所の清掃も一緒に行いました。会館避難所という小さなコミュニティではありましたが、言葉や文化の違いを乗り越えた多文化共生社会構築の可能性を間近で見ることができました。

このような関係性を広い地域社会の中で日頃から構築できたら、減災だけでなく、地域を活性化、発展させていけるものと考えます。

ちょっと Japanese Tip 日本語

小川 ひろみ さん

(2016 年 4 月より 10 月まで JICA シニア海外ボランティア)

いい天気ですね

タジキスタンにきて3か月目。出発前はこの国がどこにあるかもわからず、シルクロードの国というイメージだけでしたが、独立後 20 年、旧ロシアの重厚な建物が残る首都は小鳥のさえずりとプラタナスの並木の中にありました。相変わらず現地語も公用語のロシア語もわかりませんが、日本語教師のありがたさで学生や現地の先生方に助けられ何とか生活しています。ここでは日本人は総勢 50 人未満で日本人観光客はめったに見かけません。YouTube はみることができないし、FaceBook やインターネットにも制限があります。とはいうものの、ここにも現地の日本語教師や日本語学習者がいて、顔を合わせるたびに日に何度も「お元気ですか」と声をかけられます。

日本国内の日本人は通常、そんな挨拶はしないと返し、では「いい天気ですね」「そうですね」と訂正したものので気づきました。7 月は連日昼間の気温 38 度、湿度 20%、確かに空は青く快晴ですが、暑すぎて熱い天気は「いい」ではなく、めったにないどんより曇った日が「いい天気」です。結局「暑いですね」「そうですね」を夏の挨拶にしました。現地語で「シュモチヘル(お元気ですか)」を使う場面が日本語で「暑いですね」、ことばは機械的に一律に翻訳できるものではなく現地の環境や生活によるものだ実感しました。日本語が堪能な現地教師の中で、はるばる日本からやってきた日本人教師の役割がちょっとそこにあるのかもしれません。



タジキスタン国立言語大学キャンパス
(壁面いっぱいの肖像は大統領)

きふプロ インターンシップ生、サポートセンターボランティアの皆さんがやるKFのアクティビティ

インターネットではもっとたくさん紹介しています。
<http://blog.goo.ne.jp/kifblo>

ボランティアの高宮です。今回の「世界の現状を知ろうサロン」はエチオピアの紹介でした。JICA 職員としてエチオピアに派遣された講師の山下さんから、3 年間保健分野に携わられた経験や、エチオピアの現状、JICA とは？等を詳しく説明していただきました。

みなさんは、エチオピアはどんな国かご存知ですか？ 実は、アフリカ地域で唯一日本からの直行便が飛んでいる国であり、世界遺産がアフリカ第一位の国で、首都のアディスアベバでは市電も走っている、今経済成長が著しい国なのです。エチオピアの人口はこれから 1 億人までに増加すると言われていそうですよ。私は、エチオピアは発展途上国のイメージしかありませんでしたが、JICA や ODA の協力で色々と技術が発展していることを知りました！スマホを持っていることや、タクシーを呼べるアプリ(配車サービス。今いる場所にハイヤーを呼べるアプリ)もあること、日本よりも普及していますね！

また、アフリカの東側に位置するエチオピアは、乾季はほとんど雨が降らないようなので、空気中から水分を吸収するという水滴収集グリーンハウスを設置したりと工夫されていました。これは画期的で構造がとても気に入りました！しかし、水を得るのに 1 時間ほど行列に並んでなければならぬということでした。日本では考えられないことですが、今回の熊本地震を経験し水の大切さを知った私は理解できます。雨が降った時は、バランダにバケツを置いて、微々たる量の雨水を本当にありがたく思いながら使いました。雨がきたら、母と「恵みの雨だねえ！」と言っていました。

今日、サロンに参加してたったの 1 時間でしたが、エチオピアの今の現状を知ることができたとともにエチオピアに対するイメージも変わった 1 時間になりました。アフリカに行く機会はもちろん、行った方の話を聞くチャンスもなかなかないのでとても良い機会でした。

☆平成28年度賛助会員募集！☆

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団では賛助会員を募集しています。当事業団の活動にご理解とご支援をいただくと共に、さらなる国際交流や国際協力の輪が広がることを願っています。

会員の方には、事業団の機関誌『ニュースレターくまもと』の送付や様々な情報の提供をさせていただきます。また、当事業団主催講座の受講料会員割引や、国際交流会館駐車場の割引等の特典があります。

- ①個人会員 一口 2,000 円/年(一口以上)
- ②団体会員 一口 10,000 円/年(一口以上)

平成 29 年 3 月までの会員期間となります。

<入会のお申し込み・お問い合わせ>

一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団事務局
〒860-0806 熊本市中央区花畑町 4-18 熊本市国際交流会館
TEL:096-359-2020 FAX:096-359-5783
E-mail:ad-info@kumamoto-if.or.jp

継続・新規ご加入 ありがとうございます。

(平成 28 年 8 月 31 日までにご加入いただいた皆様)

〔個人〕50 音順 (敬称略)

- ・荒木 良祐 ・今井 浩美 ・小野原浩子 ・木下 純宏 ・酒井 健宏 ・田崎 雅義 ・中村麻友美 ・原口 賢一 ・益田隆一郎 ・山田 京子
- ・安藤ゆかり ・岩崎 恭子 ・門岡 涼 ・楠田 英孝 ・坂口 香織 ・玉置今日子 ・西 二郎 ・原田 啓子 ・松村紀代一 ・山本 修
- ・位寄 景子 ・上村由紀子 ・河上 楯夫 ・久保寺恵美 ・佐藤 幸延 ・徳永 昭臣 ・西野いぶき ・東 綾香 ・松本 礼子 ・吉川 淳子
- ・石崎 智美 ・有働 聡美 ・川嶋万里奈 ・蔵原 潤 ・島田 一浩 ・富田 和俊 ・西本 守 ・久野 桃 ・三木 絵里加 ・吉村 徹夫
- ・石原 林子 ・梅田 新紅 ・河野 寿美 ・古賀三香子 ・島田真理子 ・友成優理奈 ・庭木 健 ・平田 一博 ・宮崎 麻美 ・世利美保子
- ・泉 千草 ・悦 揮代文 ・川端 和夫 ・古閑 優子 ・嶋村 健 ・戸山 美緒 ・橋口 香織 ・福島真理子 ・宮崎 恵子 ・鷺見幹奈子
- ・一木 翠 ・大館 晴子 ・菊島 正彦 ・木庭 由香 ・嶋村 友美 ・中尾 達也 ・濱田 朋 ・福田 美絵 ・宮副 京子 ・渡具知来彌
- ・伊津野美貴 ・大野 章子 ・北田 真紀 ・近藤 美紀 ・陣内ヒロミ ・中川 秀樹 ・濱田 智子 ・古川 純子 ・毛利 恵里香 ・渡邊 晃子
- ・福岡 福子 ・王 士杰 ・木野 靖子 ・斉藤 敏宏 ・鈴木 洋一 ・中西 竜男 ・林田 尚武 ・古澤 理恵 ・持永 聡美 ・渡辺 雅明
- ・乾 誠治 ・岡崎 和也 ・木下 健一 ・坂井 菊子 ・高橋 久代 ・中西 雄一 ・葉山美和子 ・程塚 照夫 ・山内 絃子 ・彌永真理子



- 阿蘇くまもと空港より 車で 45 分
- 熊本交通センターより 徒歩 3 分
- 熊本市電花畑町より 徒歩 3 分

from Aso-Kumamoto Airport-
45minutes by car
from Kotsu Center-3minutes walk
from "Hanabata-cho"
tram stop-3minutes walk

熊本市国際交流会館 国際交流サポートセンター

開館時間 午前 9 時～午後 8 時
多文化共生オフィス TEL:096-359-4995 (直通)
休館日 第 2・第 4 月曜日、年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)
Civic Support Center for International Exchange and Cooperation
Kumamoto City International Center
Service Hours 9:00a.m.-8:00p.m.
Multicultural affairs office Phone:096-359-4995(Dial-in)
Closed: 2nd and 4th Mondays of each month, Dec. 29th-Jan. 3rd

★平成 27 年 10 月 1 日より交通センター付近は MICE 建設工事中です。シンボルロードが臨時バスターミナルとなっています。